

産業復興  
だより「株式会社ナカシヨク」  
～広がる全国からの支援の輪～

大槌町に本社を置く「株式会社ナカシヨク」は、イカの唐揚げやサバ、サンマの竜田揚げなどを製造、販売する水産加工会社です。現在は、小枕に最新設備を備えた製造工場を構えて、大手スーパーマーケットなどに商品を納入しています。

震災前から大槌町で水産加工業を営んでいましたが、津波で建物や機械設備、在庫などすべての資産を失いました。「何とかしなければいけない。とにかくふり構わずだった」と当時を振り返る齊藤勲社長は、国の支援制度を活路にして加工場を完成させました。しかし、復興需要で建設費が高騰し、材料となる水産物を保管するための冷凍施設をあきらめなければなりません。

逆境の中で支えになったのは、全国各地からの支援でした。同じく被災した仲間同士で結成した「立ち上げ！ど真ん中・おおつち」プロジェクト。一口1万円で出資を募り、復興のために全国に手助けを求めました。この取り組みが全国紙で報じられると、全国各地から申し込みが殺到し、会社再建のための道筋が見えてきました。齊藤社長は、この時の支援あってこそ今のナカシヨクがあるのだと語ります。その後、別の支援制度を活用して平成25(2013)年4月には、念願の冷凍施設も完成し、本格的な再稼働にこぎつけました。

しかし、工場と冷凍施設は完成しましたが、ま

だまだ生産能力は十分ではありません。会社の成長のためには、規模の拡大が必要です。今後は、焼き魚や煮魚の商品を生産するための工場の建設を目指しています。まだまだ課題は山積していますが、齊藤社長には大槌町復興のためのアイデアがあります。それは、「産業まつり」の復活と、食に関連したイベントの同時開催です。もっと町にたくさんの人を呼び込まなければいけない。そして、「大槌」のブランド化を目指すべきだと齊藤社長。「いずれは、大槌町からB1グランプリに出場したい」と夢は広がります。



社長の齊藤勲さん

〒028-1121 大槌町小鉤 28-161-1

TEL 0193-55-5450

\*「復興通信」では、産業復興に頑張る地元企業の姿などを伝えるコーナーを「産業復興だより」と題して毎号連載していきます。

## Topics 用地取得に司法書士来援～小山さん、川北さん着任

被災地の用地取得を支援するため復興庁が日本司法書士会連合会を通じて採用した2人の司法書士が大槌町に着任しました。5月2日に着任したのが香川県三豊市出身の小山純徳さん(66)。6月3日に着任したのが名古屋市出身の川北俊介さん(33)。それぞれの辞令交付式で碓川豊町長は「復興が加速するよう期待しています」と激励しました。

小山さんは30年間ほどの司法書士の経験があり、主に相続登記を手掛けてきました。震災で、友人の親戚が大槌で犠牲になったことから、大槌を希望して赴任してきました。一方、川北さんは同志社大学法学部を卒業後、名古屋市内の司法書士事務所に勤務し、被災地を支援したいと、派遣事業に応募しました。

小山さんは「困難があっても一つひとつ積み重ねていけば、道は開ける」、川北さんは「経験を生かし周りとの協力しながらやっていきたい」とそれぞれ抱負を語っています。

大槌町では買収予定地の所有者がわからなかったり、相続人が多数いて当事者間の話し合いに時間がかかったりして用地買収が難航しているケースが少なくありません。司法書士の来援や用地取得の迅速化をめざす復興特区法改正で、用地買収が円滑に進むことが期待されています。



用地課に配属された小山純徳さん(右)と川北俊介さん(左)＝大槌町役場

大槌町青年団体連絡協議会会長  
川端雄貴さん(25)

## 資源を生かし楽しめる町を

「子どもたちやお年寄りへの支援は、多くの人たちがやってくれている。ならば、僕たちは、ここに住んでいて良かった、楽しい、と思えるようなまちづくりをしよう」と活動しているんです。」

連絡協議会のメンバーは20代から30代の8人。若者が楽しめるようバイクツーリングや山登りを企画したり、子どもたちに楽しみながら防災を学んでもらおうと創作した、ご当地ヒーロー「防災戦隊・ホウライオー」の衣装を身に付けて登場したりしています。

川端さんは高校を卒業した後、埼玉県内の自動車整備士をめざす専門学校に進学し、専門学校を卒業すると、千葉県内で働きました。バイクが趣味でしたが、バイクで気軽に出かけられる場所が少なかったと言います。

大槌に戻り、若い人が楽しめる施設は少ないけれど、自然の遊び場がたくさんある故郷を見直したそうです。

現在、漁師修行中。「修行を積んで男の浜の料理教室をやりたい。若者が楽しめる企画をどんどん実行していきたいです」  
安渡の実家は被災し、仮設住宅で暮らしています。「どのような町になるのかわかりませんが、どんな状況でも僕は楽しんでいこう。ユーモアのある笑顔の素敵な人になりたい」  
「自分のまちを知り、資源を生かして楽しむ」と川端さん。若い人たちの自由な発想が若者の定住につながっていく。そんな可能性が感じられました。



川端雄貴さん

震災後、多くの個人や団体が大槌町の復興支援に取り組んでいます。被災者に寄り添い、ともに歩む、これらの人や団体を紹介します。

## 「復興を支える人 支える団体」

NPO法人  
まちづくり・ぐるっとおおつち

## 被災者を支援し多様な活動

町民が行政と協働してまちづくりを展開していく。そんな時代が来る。当時、町づくり活動をしてきた「和夢」というグループの若者たちを中心に平成13(2001)年7月に設立。御社地ふれあいセンターの運営管理を町から委託され、そこを拠点に文化活動を始め、地産地消をめざした活動や環境保全の活動などを展開してきました。

震災後は町外の支援団体と交流しながら活動の幅を広げてきました。被災者の生活支援を目的にした「おおつち人形」の制作と販売、「福祉車」での買い物、通院の支援をしていました。現在は仮設住宅団地での野菜の移動販売、町民の手づくり品を一カ所に集め、おおつち人形も含めた販売、手づくり品の講習会も出来るマスト内の「ぐるっとおおつちショップ」の運営……。

多様な被災者支援活動の中で、地元の人に密着し、親しまれているのが「おおつちさいがいエフエム」です。町からの受託事業として運営する臨時の災害FMで、大槌弁で

大槌の現状や魅力を伝えていきます。震災の停電時に多くの人がラジオをよりどころにしています。

「人の声が聞こえるという安心感」広域にきめ細かい地域の情報を発信出来、多くの人が様々な状況下で情報を得られる。ラジオは助け合いの町には欠かせないという思いがあり、コミュニティFMへの自立をめざして活動しています。代表理事の小向幹雄さん(79)は「震災前より活動の幅は広がりましたが、顔の見える交流をはかるという軸は変わっていません。心豊かに、暮らしやすい、住みやすい幸福のあるまちに、という思いで活動しています」と話しています。



「おおつちさいがいエフエム」の収録風景

〒028-1121  
大槌町小鉤27-41-4  
TEL 0193(55)5221